

## 努力事項 その4 (小学校)

「学校教育指導の重点」の図画工作の努力事項をひとつずつ考えていきます。今回は、学習指導要領の内容に照らして、以下について考えてみます。

題材を通して育みたい資質や能力を踏まえて指導計画を作成し

ねらいをもとに評価場面と評価方法を工夫しましょう。

### 1 「題材を通して育みたい資質や能力を踏まえて指導計画を作成し」とは？

題材を構成するときに、「描いたり造ったりすることによって何を教えるのか、どういう力を身に付けさせるのか。」を明確にして題材を構成しましょう、ということです。

例えば、6年生で絵に表す題材を設定した場合、どういう絵を描くことができたならねらいを達成したと言えるのか、明らかにしておきましょうということです。

これについて、B小学校の「表し方をくふうして」という題材を例に考えてみます。B小学校は「表し方をくふうして」という題材で、次のような目標を設定しました。

自分が大切に思う風景の美しさを感じながら、表したいことに合った視点や表現方法を考えて、絵に表す。

この題材では、「表したいことに合った視点」、「表したいことに合った表現方法」を考えて描くことがねらいとなっていることがわかります。評価規準は次の通りです。

- 自分の生活や身の回りから、自分の表したいことの主題を見つけ、絵に表すことに取り組もうとしている。(造形への関心・意欲・態度)
- 表したいことの主題に合った視点を考えたり、感じた季節感が表れるように形や色を考えたりしている。(発想や構想の能力)
- 表したいことが伝わるように材料や用具の特長を生かしたり、表現に適した方法を選んだりして、表し方を工夫している。(創造的な技能)
- 感じ方や表し方について友人と話し合い、作品の表現を多様な見方でとらえている。(鑑賞の能力)

この評価規準は共通事項を考慮しており、題材を通して育みたい資質や能力を踏まえていると言えます。指導計画を作成する際は、このように、共通事項を踏まえて「題材のねらい」、「題材の評価計画」等を作成しましょう。

第5学年及び第6学年の共通事項は次の通りです。

(1)「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

- ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえること。
- イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージを持つこと。

さきほどの評価規準をさらに具体的にしてみます。

- 自分が大切に思う風景を描くことを通して、自分の心や感情を表すことに一生懸命取り組んでいる。(造形への関心・意欲・態度)
- 自分が大切に思う風景を描くことを通して、心や感情について自分の思い描いたイメージが表れるような色や形を考えている。(発想や構想の能力)  
例：〔長い廊下だなぁ(感じたこと)→奥行き、遠近法(形)〕  
〔荒れていた海が静まりかえった瞬間水面が輝いてきれいになった(感じたこと)→イメージ通りの海の色(色)、用紙の選択(質感)〕  
〔公園の新緑がきれいでとても好き(感じたこと)→視点を変えて木々や緑を強調(形)〕
- 絵の具や用紙などの特徴を生かしながら、濃淡やにじみ、重なりや動きなど、表し方を工夫している。(創造的な技能)  
例：〔長い廊下(奥行き、距離感)→近くは濃く、遠くなるほど薄く塗ろうとする〕  
→近くは大きく、遠くなるほど小さく描こうとする〕  
〔静まりかえった瞬間の海(水面の色、光の反射の色)→水面、光の反射、などイメージ通りの色を作ろうとしている)〕  
→輝きを表すために、ふさわしい材質の紙を選ぼうとしている)〕  
〔視点を変えてみた新緑の公園(強調された木々や緑)→座って見上げた目線で描くことで木々や緑を強調しようとしている)〕
- 自他の作品について語ったり、友人と話し合ったりしながら、濃淡やにじみ、重なりや動きなどの表現の意図や特徴などを捉えている。(鑑賞の能力)

となります。



## 2 ねらいをもとに評価場面と評価方法を工夫しましょう、とは？

指導したことを評価しましょう。

これは、当たり前のことのようで図画工作科では難しいことです。

題材や本時のねらいではない、絵の作品としての完成度を評価してしまうことはないでしょうか。教科として教えるべき内容を指導し、それを評価することが大切です。その際、計画段階で教えるべき内容を明確にして指導し、評価の段階ではそれを評価しましょう。

B小学校の「表し方をくふうして」の場合は、上記の、評価規準を具体的にした内容を指導して評価することが大切です。

評価場面については、指導過程における評価（形成的評価）を大切にしましょう。題材や授業が終わってから評価しても、その評価の結果を指導に役立てることはできません。

活動が終わり、作品が完成してから評価しても、その評価を指導に生かすことができません。それは、単に成績を出すための評定になってしまいます。児童が主題を決める段階、製作に取りかかる段階、思いを巡らせたり、試行錯誤をしている段階、そのそれぞれの段階で、机間指導等、**ねらいを達成できるように**、個に応じた指導と評価を繰り返しましょう。

評価方法については、作品からだけでなく、作品の製作過程を観察したり、色使いや形について、児童にその意図を聞いたりして、総合的に評価していきましょう。

作品として描かれている絵、それだけを見て評価するのではなく、児童の意図や思いを把握して評価に役立てましょう。ワークシートや児童との会話から下記の内容を把握し評価に役立てることが大切です。

- ① 児童が主題についてどんなイメージを持っているのか。
- ② 主題の感情をどう色や形に表したかったのか。
- ③ 児童は、イメージ通りに表すことができたと感じているか。



次回は、中学校の努力事項「生徒が、自己の感性をもとに自信を持って表現や鑑賞の活動に取り組み、互いの表現のよさや個性などを認め合いながら活動できるよう、評価場面の設定を工夫する。」について考えてみます。

7月19日（金）頃アップの予定です。